

機関番号： 53301  
 研究種目： 基盤研究（C）  
 研究期間： 2007～2010  
 課題番号： 19560658  
 研究課題名（和文） キリコ祭りを通してみる奥能登地域の景観構造の研究  
 研究課題名（英文） A Study on Scenery Structure of Okunoto-Area through Analyses of Kiriko-Festival  
 研究代表者  
 熊澤 栄二 (KUMAZAWA EIJI)  
 石川工業高等専門学校・建築学科・准教授  
 研究者番号： 30321425

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、潜在的に潜む地域特有の場所構造を基として修景・保存および地域景観形成の指針を明らかにし（基礎研究）、その研究成果を基として実際の景観整備手法の開発する（応用研究）ことを目的とする。

申請研究では、基礎研究の第一段階として石川県能登半島最北端に位置する珠洲を事例とした場所構造の解明を目的とする研究を行った。第二段階として地域の祭礼の存続の可能性を明らかにするため各地区公民館でのヒアリング調査を行った。

## 研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to contribute to protection of cultural landscape of Oku-Noto Area as to Kiriko festival. The study includes two parts: one is to make clear principal of local landscape development based on hidden topological structure (fundamental study), and the other is to development method of landscaping according to the principal (applicable study).

As a first step, I made clear the topological structures in Suzu area: the northeast area in Noto peninsular; as the second step, I interviewed director of each community center in Suzu city to reveal the possibilities of Kiriko festival continue.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19 年度	2,300,000	690,000	2,990,000
20 年度	500,000	150,000	650,000
21 年度	500,000	150,000	650,000
22 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：建築史・意匠

科研費の分科・細目：5304

キーワード：環境形成史、地域景観史、建築論、民俗学、宗教史、キリコ祭り、奥能登珠洲

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 国内外の研究動向

## ①国内の研究状況：

一般的に都市と祭礼の関係については、由

谷裕哉が指摘するように民俗学者ヴァン=ジュネップを始祖とする「過程分析」と社会学者デュルケムを始祖とする「社会統合論」の二つの研究の方向性を確認することができ

る（「都市祭礼の言説分析に向けて—小松市お旅まつりの例—」、『加能民俗研究』33号、平成14年3月）。過程分析のタイプとして、我国においては柳田國男「日本の祭」を嚆矢として、柳川啓一『祭りの宗教学』や藪田稔『祭りの現象学』などの宗教学者による都市祭礼の調査を基礎としつつ神聖的儀礼から現代の祭りの意味を考察する研究が特に1970年代から90年代までの主流を成していた。一方、社会的統合論のタイプとしては、80年代以降、茂木栄「都市とイベント」、宇野正人「新しい祭の成立と展開」など現代の祭礼と行政的な関与を問題にした研究では祭りを通じて住民統合ならびに社会福祉に都市祭礼が寄与するかを解明した研究が注目を浴びていた。

## ②海外の研究状況

海外では1960年代に、M.エリアーデのヒエロファニー（聖体現示）に都市発生の始原を求める宗教現象学の研究をはじめとして、A.シュッツの宗教儀礼の中から人間の生きた環境の意味を見出す現象学的社会学、特に80年代以降、個人の空間から人間の生活環境の全幅の構成を解明するイー・フー・トゥアンを旗手とする現象学的地理学、あるいはC.N.シュルツによる現象学的空間論、さらに和辻哲郎の「風土学」を批判的に「通態性（Tranjectivité）」という独自の環境概念を基に基礎付け、主客二元論的な環境理解の乗り越えを目指すA.ベルクの独自の風土学など、いずれの研究においても日常的な社会的な現実を多様な諸現象からの構成として把握し、その「生きた環境の意味」の解明を目指す「現象学を基底」とする景観ないし風景研究（以後、「風景論」とする）が活発である。しかしその一方で、先に記した社会統合的な側面が弱く、これらの理論的な基礎研究段階から実際の景観問題への対応が可能な手法論の開発が求められている。

## ③研究状況を踏まえて申請研究の位置づけ：

本研究も日常的な現実を非日常的な諸現実など多様な社会的現実から構成されていることを解明する風景論研究の延長線上に位置づけられる。しかし本研究では、以上の風景論研究を実際の景観問題へ応用する社会統合論的研究への応用研究と位置づけている。

### (2) 研究の動機：

#### ①申請に至るまでの研究経歴から：

申請者は、平成6年から平成11年にかけて京都北域に鎮座する上賀茂神社の御阿禮祭と京都の風景との関係を研究し、平成11年に博士号請求論文として提出している。また平成7-9年には17世紀に編纂された「名所

都鳥」を基に京の名所とその場所的構造を解明する研究、あるいは京都嵯峨野の歌枕の地に関する詩歌の分析による諸場所の構造の解明する研究、同じく嵯峨野界隈に鎮座する松尾大社の松尾祭を通じて見られる境界現象についての研究など京都における場所構造と風景ないしは景観現象との関係について研究を行ってきた。

また同時期に Institut d'Asie Orientale MRASH との共同研究“Historical Atlas of Kyoto”において京都の名所と観光文化の歴史的な展開について研究を行ってきた。

さらに現在の教育機関に着任後の平成13年より申請研究であるキリコ祭りに関するプレ調査に着手しており奥能登においてキリコ自体の保有数をはじめ各地域での祭礼の実態についても未だ把握されていない状況であることが明らかになった。

## ②申請に至るまでのまちづくり活動から：

研究履歴に加えて、平成12年以降は学校の所在地である石川県河北郡津幡町の中心市街地活性化対策に関わる策定委員、TMO 立ち上げに関する活動、津幡町都市計画審議委員など幅広くまちづくりに関する活動に参加し、また平成18年には能登町における真実家文書を公開する「プチミュージアムの郷構想」などの奥能登のまちづくり活動にも参加している。

## ③申請研究の動機：

①の景観研究活動とともに②の実際のまちづくり活動の経験からも、日常のまちの風景・景観が共同体の年中行事やライフサイクルの通過儀礼など他者との共同的に住まうことで現象することの実感が本研究の動機となっており、また着想の原点となっている。

加えて、奥能登の場合、キリコについての散発的な研究ストックはあるが、体系的にキリコ文化を総合したものは管見の及ぶ限り皆無である。今後、限界集落が多く存在する地域であるため、祭礼の現状記録という観点からも本研究の動機となっている。

## 2. 研究の目的

### (1) 目的

①本研究の目的は、潜在的に潜む地域特有の場所構造を基として修景・保存および地域景観形成の指針を明らかにし（基礎研究）、その研究成果を基として実際の景観整備手法の開発を目的とする（応用研究）。

②申請研究では、基礎研究の第一段階として石川県能登半島最北端に位置する珠洲を事例とした場所構造の解明を目的とする研究を計画している。

## (2) 意義

特に本研究で対象とする地域とは、もともと独自の歴史・文化が残されているにも関わらず、京都を代表とする歴史都市を標榜するような地域の性格が明快な場所ではなく、寧ろ地方の中堅都市あるいは衰退しつつあるような市街地のような地方中堅ないしは小都市（以後「まち」とする）である。これら地方のまちは概して市街地活性化計画など経済効果に偏重したマスタープランや表層的な外観統一により、そのまちに既存する豊かな歴史的・文化的文脈が無視された計画に随し易い。そのため本研究で提唱するような地域固有の場所構造を基にした開発計画が望まれる。

## 3. 研究の方法

### (1) 方法論

#### ①対象としての現象：祭礼を通して現れる風景

本研究の全体の目的を達成するために、「対象とする地域」を歴史・文化性が喪失しつつある「まち」としたが、本研究では分析の対象とする現象、つまり地域の歴史・文化の現れを「祭礼を通して現れる風景」とする。これには「まち」という現象を扱うための作業仮説が含まれている。

例えば粘菌学者でも著名な南方熊楠は明治末期「神社合併反対意見」において「全く風景を神として齋けるなり」と日本の風景の特色を喝破しているが、わが国の風景観は密接に宗教観と結びついていることから「祭礼」とは単なる宗教的行為という以上に、伊従勉が指摘するように「祭祀の時空間は、日常には潜んでいる風景の意味を顕在化させる」（「風景の多次元 流通する風景と流通以前の風景」/『環境イメージ論—人間環境の重層的風景』, 弘文堂）のであり、祭礼の時を通して共同体としてのまちの風景を現前化させると言えよう。それ故「研究の対象」を「祭礼を通して現れる風景」としたが、まちの風景を研究するに当たって祭礼を研究対象に据えることの有効性は以下のように指摘することができる。

1. 祭祀は日常の潜んだ風景の意味を顕在化させる。
2. 祭祀は共同体の風景を顕現させる。

#### ②研究対象：奥能登キリコ祭り

哲学者 西谷啓治は昭和 40 年代に故郷に寄せたエッセ「奥能登の風光」において奥能登の清澄な風光が継承されていくことを切望したにも関わらず、珠洲市では電源立地を目指し奥能登の聖地である金剛崎界隈に原子力発電所の誘致を推進してきた。奇しくも近年誘致計画は頓挫したものの、この一連の事

件からも既に珠洲において生活世界に根付いてきた諸場所の意味が既に喪失していることが明らかであろう。そこで本申請研究では、奥能登一ノ宮である須須神社で斎行される大祭「キリコ祭り」の調査を通して文化的に培われてきた珠洲の諸場所の意味とその構造を明らかにすることを目指す。

### (2) 調査および分析の方法

申請研究においては、次のようなプロセスを踏まえて珠洲の諸場所の構造を明らかにする。

#### ①祭礼調査：フィールドワークおよび文献調査を中心とした資料収集研究活動

##### 1. 各地区祭礼調査

- ・基礎調査：〈祭礼調査〉現代のキリコ祭りの手順の保存。〈文献調査〉過去の記録の整理
- ・キリコ祭りの復原：神輿渡御ルート of 推定と祭礼地の推定作業

##### 2. 分析：

- ・奥能登地方における風景視の歴史的変遷の考察。風景視のエピステーメの変遷の原因の解明
- ・珠洲の諸場所の意味の解明とその構造の解明

#### ②ヒアリング調査：

祭礼調査のプレ調査としての各部落単位でのヒアリング調査に加えて、公民館区 10 地区の珠洲の祭礼状況についての調査を行う。

#### ③フォーラムおよび展示会：

「すず再発見フォーラム」と題して住民との祭礼文化の魅力の発見と今後の維持についての意見交換会を実施する。

## 4. 研究成果

### (1) 祭礼調査

#### ①祭礼調査成果

1. 平成 19 年度は、雲津、上戸、正院、鶴島、引砂、狼煙、大屋、川浦、折戸、高屋の祭礼調査を計画していたが、折戸地区については日程調整が困難ため次年度持ち越しとした。
2. 平成 20 年度は高屋地区（10 月 10 日）、折戸地区の 5 地区を対象とした秋季祭礼調査を実施した。但し、本年度の調査対象となっていた折戸地区は祭礼前日に中止が決定になり来年度持ち越し調査となった（10 月 11 日）。
3. 平成 21 年度は寺家地区および馬縷地区の祭礼調査を行い、申請計画当初に予定していた全ての地区の調査を終了した。

#### ②奥能登地域での祭礼形態の分析

##### 1. 祭礼時期のパターン：

調査によって得られた記録より、祭礼開催階

催時期が内浦地区の南方から北上し、三崎から外浦に折り返して輪島方向に能登半島を周回する形で秋季祭りが開催されていることが明らかになった。

## 2. 祭礼手順のパタン：

祭礼手順についても、地区ごとに異なっており標準的な祭礼手順を明らかにすることは出来なかったが、およそ内浦地域と外浦地域で祭礼手順を分類できることを明らかにした。さらに調査を進めることで秋季祭における祭礼所作の標準を明らかにしたい。

## ③分析：風景史の解明

現在、奥能登全域に広がったキリコ祭りを手掛かりとして現地調査に加えて文献調査を重ねて考察した結果、風景史として珠洲では風景の変遷として3期の変動期があったことが推定できた。

1. 第1期（鎌倉期以前）：山伏山および金剛崎を軸とする宗教的な風景の軸線を想定できる。特に古代の珠洲神社の位置は特定できなかったが、現在、アレドと呼ばれる場所に原珠洲神社を想定することができた。山伏山および金剛崎の風景の軸線が宗教的な意味を見出すことができた。

2. 第2期（修験道以後）：古代の聖地が修験道場として展開するに至り、珠洲地域における宗教的な超越の意味に変化が起きたことが想定される。奥能登の肉眼で見られる風景に宗教的な意味を見出すために、遠方の白山・石動山の聖地を重ねる、つまり象徴としての風景の見方を指摘することができた。

3. 第3期（荘園制以後）：荘園制以降、本地垂迹説による神名読み替え、起源説の創設など、過去の神聖なものの意味を中央の文化から積極的に読み替えることにより珠洲における風景史の変質が決定的となる。肉眼で確認できた風景の神秘は、抽象的・超越的な視線からの風景の眼差しへと変貌を遂げ、実体的な風景と宗教上での神秘との乖離が決定的となった。

4. 第4期（江戸末期）：風景と宗教上の超越の乖離が決定的になった江戸期においては、能登半島の経済上の発展とともに、新しい宗教上の風景を創出することになる。これが現在のキリコ祭りの原型となり、夜に揺らめくキリコの明りが醸し出す神秘の風景に再度宗教上の回復することになる。

## (2)ヒアリング調査

### ①ヒアリング調査結果

平成19年度では、上述の祭礼調査対象11地区の事前調査として地区の代表者にヒアリングを行い、地区の秋季祭の歴史、近年の組織、キリコ巡幸の順路等の確認を行った。併せて、祭礼日に振る舞われる「ヨバレ料理」の記録を採取している。平成20年度は、狼煙

地区（11月26日）、寺家地区（11月27日）、熊谷地区（2月4日）の3地区にヒアリング調査を行い、昨年度の補足調査とした。

## ②分析：

採取したデータをもとに時系列に神輿巡幸ルートを記した祭礼マップを作成中である。祭礼マップを基にした「ヴァーチャル・キリコ会館」の構想を現在珠洲市とともに進めている。

## (3)フォーラムおよび展示会

### ①フォーラム開催実績

1. 平成19年度は珠洲でも初となる本格的なキリコ祭りに関するフォーラム「すず再発見フォーラム」を企画し、第1回の「キリコ祭り、を知る」を珠洲市および珠洲市教育委員会の協力により実施した（11月17日）。

2. 平成20年度は、キリコ文化を中心としたフォーラムを開催し、キリコ会館・元館長の藤平朝雄氏をはじめとして奥能登塩田村組合長の横道嘉弘氏、羽黒神社宮司の高山哲典氏、金沢星稜大学の堂下恵講師を招聘し「キリコ祭りを深く知る」フォーラムを開催した（9月16日）。

3. 平成21年度は、「キリコ祭り囃子写真展」（12月20日-27日）祭礼の写真を中心に地域住民に紹介し、併せて祭礼継続についての住民の声を集約した。なお、今回は珠洲市が企画した「奥能登キリコ囃子フォーラム」と共同開催を行った。

### ②フォーラム討議による考察：

市民参加型のフォーラムの3回の実施により、学術的成果をより広い範囲で住民と共有するとともに、今後の祭礼の保存継承活動についての具体的な問題把握を行うことができた。

さらに、地元の写真家との連携により、『キリコ囃子写真展』を開催することができ、祭礼における地域差などを視覚的に表現することができた。

成果を踏まえて、珠洲におけるまちづくり活動への方針を決定することができた。

1. 奥能登における文化継承の現状調査
2. キリコなど奥能登独自の文化を教育副読本で継承支援する取組

### (4)研究成果を踏まえた新しい研究の開始：

①奥能登における文化継承の現状調査：調査結果をデータベース化する試みとともに、キリコ本体の3次元測量とその3次元モデル化について、(株)国土開発センターとの共同研究を開始している。

### ②教育副読本で継承支援する取組：

ヒアリング調査を基とした研究とともに、実践的に町づくりのツールとして副読本の作成企画を珠洲市および珠洲市教育委員会と平成 22 年度より開始している。この資料の完成により、研究成果を活かした地域貢献とともに、新しい観光産業に寄与できることを期待している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ①熊澤栄二、堀内美緒、佐々木理紗、四方葵、奥能登珠洲における地域づくりに向けた祭礼の衰退原因の分析、ランドスケープ研究論文集、査読有、74(5)、2011、未定
- ②熊澤栄二、佐々木理紗、四方葵、奥能登キリコ祭りを通じた町づくりの研究 III—住民ヒアリングに基づく祭礼の衰退現象の分析—、日本建築学会北陸支部、査読無、53 巻、587-590、2010
- ③熊澤栄二、四方葵、奥能登キリコ祭りを通じた町づくりの研究、日本建築学会北陸支部、査読無、52 巻、373-376、2009
- ④熊澤栄二、今村友里子、「寺家キリコ祭り」を通してみる風景に関する研究 IX—近世珠洲における風景視 1—、日本建築学会北陸支部、査読無、52 巻、577-580、2009、
- ⑤熊澤栄二、美作羽衣、「寺家キリコ祭り」を通してみる風景に関する研究 VIII—中世珠洲荘園制度からみる風景構造 1—、日本建築学会北陸支部、査読無、51 巻、505-508、2008、
- ⑥熊澤栄二、美作羽衣、「寺家キリコ祭り」を通してみる風景に関する研究 VI—奥能登修験から導く宗教的世界構造—、日本建築学会北陸支部、査読無、50 巻、269-272、2007

[学会発表] (計 5 件)

- ①熊澤栄二、佐々木理紗、四方葵、奥能登キリコ祭りを通じた町づくりの研究 IV—地域傾向分析から導くキリコ文化圏—、日本建築学会、富山、481-482、2010
- ②熊澤栄二、四方葵、奥能登キリコ祭りを通じた町づくりの研究 II—祭礼運用から導くキリコ文化圏—、日本建築学会、仙台、409-410、2009
- ③熊澤栄二、今村友里子、「寺家キリコ祭り」を通してみる風景に関する研究 X—近世珠洲における風景視 2—、日本建築学会、仙台、531-532、2009
- ④熊澤栄二、美作羽衣、「寺家キリコ祭り」を通してみる風景に関する研究 IX—中世珠洲荘園制度からみる風景構造 2—、日本建築学会、広島、416-417、2008
- ⑤熊澤栄二、美作羽衣、「寺家キリコ祭り」

を通してみる風景に関する研究 VII—泰澄伝承にみる宗教的世界構造—、日本建築学会、福岡、474-478、2007

[図書] (計 1 件)

- ①日本の里山・里海評価: クラスターの経験と教訓. 里山・里海: 生態系と人間の福利: 日本の社会生態学的生産ランドスケープ 北信越の経験と教訓—過疎・高齢化を克服し、豊かな自然と伝統を活かす—、熊澤栄二、堀内美緒(他 190 名)、国連大学高等研究所 東京、2010、109

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

熊澤 栄二(KUMAZAWA EIJI)

石川工業高等専門学校・建築学科・准教授  
研究者番号: 30321425

##### (2) 研究分担者 無

##### (3) 連携研究者

堀内美緒 (HORIUCHI MIO)

金沢大学・地域連携推進センター・博士研究員

研究者番号: 00579196